

黄 疸

澤田藤一郎 九州大学名誉教授・北九州市立小倉病院長

柴田 雄蔵 済生会福岡総合病院副院長

新潟大学教授

市 田 文 弘

わが国の消化器病学、とくに肝臓学における大先輩で、この方面で数多くの秀れた指導者を養成された九州大学の澤田藤一郎名誉教授がその門下生で、以前アメリカの Watson 教授のもとで研究されていた柴田雄蔵先生との共著として、この度「黄疸」(医学書院)を出版された。

この序文には「医師を志し、医学を学んだものは必ずや一度は黄疸という徴候に興味をもったことであろう。黄疸は体が黄色に染まる徴候で簡単であり、胆赤色素すなわちビリルビンで染まったものだろうということは誰しも考えることであるが、古来甲論乙駁ながい歴史をもって今日に至っている」という文章ではじまり、澤田先生のビリルビンとの出会い、臓器摘出保生灌流実験による肝臓、および肺臓においてインジカンの生成を証明した時の喜び、ビリルビンとグルクロン酸とを測定しながら、直接ビリルビンがグルクロン酸ビリルビンであることに気づかなかった悔しさが手をとるように読みとられる。そして「全く研究は失敗の連続であり、そのくり返しであり、アルバイトすなわち労働とはよく言ったもので、自分の永年の研究歴をかえりみて、つくづくその感を深くする」という言葉で結ばれている。わが国の肝臓学の先覚者である澤田先生のこの生の言葉を学

生諸君、あるいは若い研究者が十分に噛みしめてほしいものである。しかも学生諸君が講義で教えられて、知っている諸々の学問的な既成事実、たとえば直接ビリルビンはグルクロン酸の抱合型であるとか、肝炎ウイルスの分離、同定に先輩達はいかに努力し、苦渋したかを知ることには知識を正確にする上からもきわめて重要なことである。

本書においては、まずビリルビン代謝を中心にした黄疸発生論について、その歴史的考察からはじまり、最近のもっとも新しい知見が研究の流れに従いながら解説されている。この中で「考えてみると黄染を惹起させる色素であるビリルビンが赤黄色でないとしたら、黄疸の診断および治療は私ども人類にとってきわめて困難であつたに違いない。ここに自然の恩ちょうに頭を下げたい気持がする」と示唆に富んだ言葉が自然のままに、何のためらいもなく書かれているのがきわめて印象深い。またこの歴史的考察の中にでてくる有名な教授の方々の名前、たとえばビリルビンを直接型と間接型に分けたオランダの Van den Bergh 教授、ヘミン、ビリルビンなどの化学構造を決定したミュンヘン大学有機化学教室の Hans Fischer 教授、またウロビリノーゲンの腸内発生、腸肝循環で有名な同大学内科の

Friedrich von Muller 教授、さらに“Seröse Entzündung”の提唱者で、当時もっとも多く読まれた“Leberkrankheiten”の著者であるウィーン大学内科の Hans Eppinger 教授、わが国では「黄疸発生一元論」を出版され、「肝機能障害なくして黄疸はあり得ない」という鋭い論法で黄疸の発生機序を説明された大野章三教授などのお名前がでて、その論ずるところも直截に書かれており、小生にとっては大変懐しく本書を一気に通読させた。

また本書の特徴としては、ビリルビン代謝の中で、ややもすると等閑視されてきたウロビリリン群について、その歴史的考察にはじまり、生化学的特性、分類法、腸肝循環、尿ウロビリノーゲン反応とインジカンなど詳細に書かれているので、この方面の知識として、また研究の指針として示唆する所が多い。

本書はわが国の従来からの専門書には少ない頁数しかとられていない歴史的考察を肩が凝らないよう書かれ、しかも最近の知見も十分盛りれているので、臨床家はもちろん、この方面に興味をもつ若い研究者ならびに学生諸君には是非とも一読していただきたい好著である。

A5 頁132 図44 写真3 原色図1
1978 年2,500 円160 医学書院刊